スリー・カップス・オブ・ティー

1杯目はよそ者、2杯目はお客、3杯目は家族

グレッグ・モーテンソン
デイヴィッド・オリヴァー・レーリン

藤村 奈緒美[訳]

sanctuary books

1杯目はよそ者。

1杯目のお茶は、
突如訪れた旅人のために。

2杯目はお客。

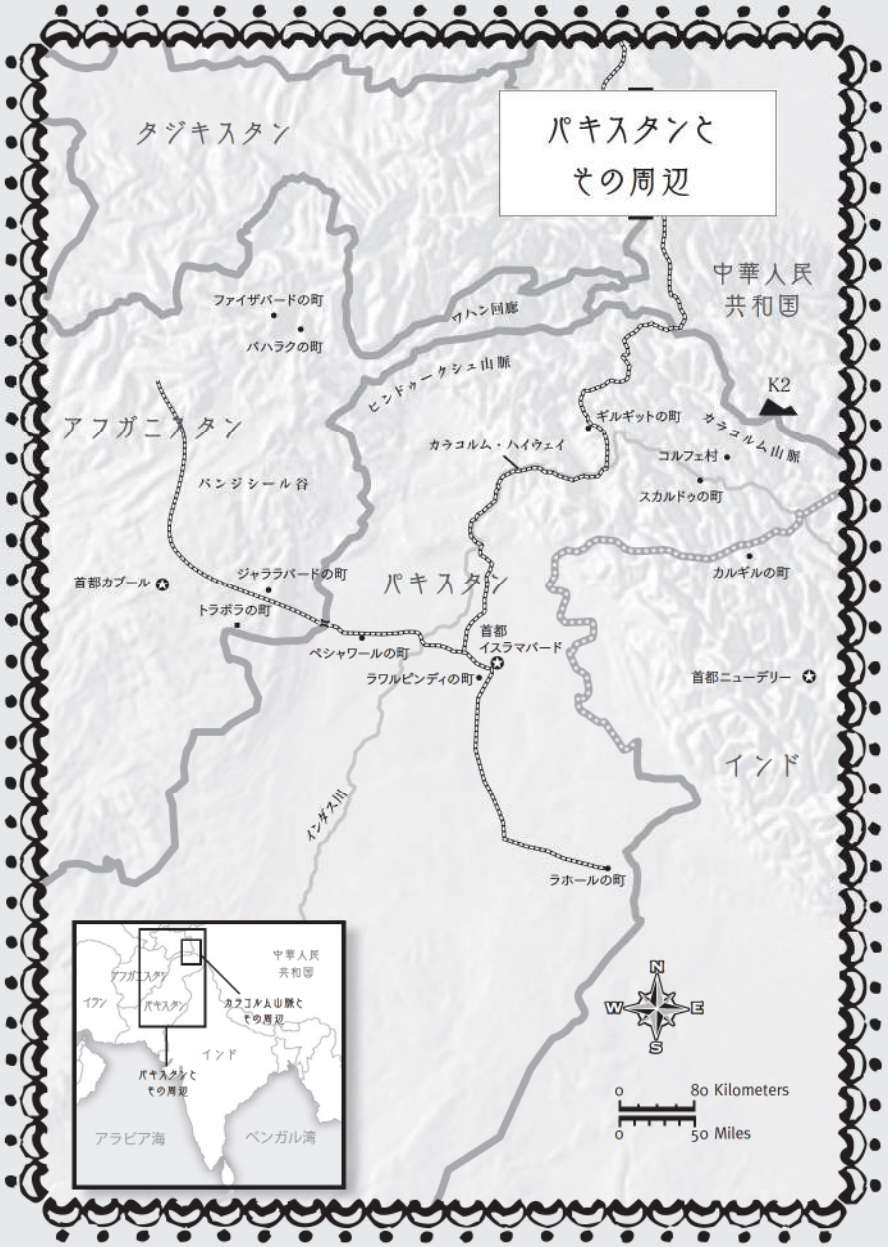
2杯目のお茶は、
共に力を合わせる友人のために。

3杯目は家族。

3杯目のお茶は、
ずっと寄り添ってきた家族のために。

One Man's Journey to
Change the World.

カラコルム山脈と
その周辺
カラコルム・ハイウェイ
中華人民
共和国
ムズターク・タワー山
K2
ブロードピーク山
ガッシャブルム2山
ガッシャブルム1山
カラコルム山脈
アスコーレ村
コルフェ村
マッシャーブルム山
ブラルドゥ川
インダス川
フシェ村
フシェ渓谷
スカルドゥの町
バルティスタン
パキスタン
ショーク川
グルトリ渓谷
カルギルの町
停戦ライン
インド
0
40 Kilometers
0
25 Miles
N
W
E
S


パキスタンと
その周辺
タジキスタン
中華人民
共和国
ファイザバードの町
バハラクの町
ワハン回廊
ヒンドゥークシュ山脈
K2
アフガニスタン
ギルギットの町
カラコルム山脈
カラコルム・ハイウェイ
コルフェ村
パンジシール谷
スカルドゥの町
首都カブール
ジャララバードの町
パキスタン
カルギルの町
トラボラの町
首都
イスラマバード
ペシャワールの町
ラワルピンディの町
首都ニューデリー
インド
インダス川
ラホールの町
中華人民
共和国
アフガニスタン
イラン
パキスタン
カラコルム山脈と
その周辺
インド
パキスタンと
その周辺
アラビア海
ベンガル湾
N
W
E
S
0
80 Kilometers
0
50 Miles

もくじ

Contents

CHAPTER 1 失敗 011
CHAPTER 2 川の反対側 027
CHAPTER 3 進歩と達成 047
CHAPTER 4 セルフ・ストレージ 061
CHAPTER 5 580通の手紙と1枚の小切手 081
CHAPTER 6 たそがれのラワルピンディ 099
CHAPTER 7 けわしい道のり 121
CHAPTER 8 ブラルドゥ河にはばまれて 143
CHAPTER 9 国民の声 169
CHAPTER 10 橋をかける 185
CHAPTER 11 6日間 211
CHAPTER 12 ハジ・アリの教え 229
CHAPTER 13 「思い出よりもほほえみを」 263
CHAPTER 14 世界のつりあい 299
CHAPTER 15 多忙な日々 317
CHAPTER 16 赤いビロードの箱 343
CHAPTER 17 砂地に育つ桜の木 363
CHAPTER 18 亡骸の前で 385
CHAPTER 19 ニューヨークという村 411
CHAPTER 20 タリバンとお茶を 445
CHAPTER 21 ラムズフェルドの靴 473
CHAPTER 22 「無知が敵」 501
CHAPTER 23 これらの石を学校に 525
あとがき 556

CHAPTER

1

失 敗

Failure

暗いときには星が見える。

——ペルシアのことわざ

パキスタンのカラコルム山脈。

わずか幅160キロほどの地域に、世界で最も高い山々が60以上そびえている。そしてその厳しくも美しい姿が、誰も知らない荒野を見おろしている。

この不毛な氷の世界を行きかうのは、ユキヒョウや野生ヤギ（アイベックス）などごく限られた生物だけだ。20世紀になるまで、世界で2番目に高い山、〝K2〟の存在はただの噂にすぎなかった。

そんなK2から、人間が暮らすインダス渓谷にいたるまで、4つの頂を持つガッシャブルム山と、するどい刃のようなグレート・トランゴ・タワー山がつらなる。そしてその間をバルトロ氷河が流れている。この凍った川の流れは1日にわずか10センチ。動いているようには見えない。

ここはまるで聖堂のような静寂に包まれた、岩と氷だけの世界だ。

1993年9月2日の午後。

この地を行く僕の歩みも、バルトロ氷河と変わらずゆっくりだった。

僕はパキスタン人のポーターと同じ、つぎはぎだらけの泥色のズボン（シャルワール）とシャツ（カミーズ）で身を包み、黒い革の登山靴を履いている。いくら足を動かしてもなかなか前に進めない。靴はバルトロ氷河にあわせて、ひとりでに動いているような気がした。

僕は同じ登山隊のメンバーで、いっしょにK2からおりてきた仲間、スコット・ダースニーの姿を探していた。きっとスコットはどこかの岩に座って待ち受けていて、僕を見るなり「のろいやつだ

な」とからかってくるにちがいない。
ここから西に流れる支流にそって進んでいけば、80キロほどでアスコーレという村にたどりつく。そこからジープを拾って、山からおりられるだろうと思っていた。だがバルトロ氷河は、道というより迷路に近かった。
僕はまだ自分がはぐれたことに気づいていなかった。まちがえて南に進んでしまっていたのだ。このあたりは氷河からくずれ落ちた氷が散らばり、迷いこんだらなかなか出られない。しかもこの高地では薄い空気の中で、インドとパキスタンが争い、砲弾を投げつけあっている。
いつもなら、もっと気をつけていた。生死にかかわる情報には十分に注意しているつもりだった。途中で運良くムザファというポーターに出くわし、気を抜いてしまったのかもしれない。ムザファが重たい荷物、登山用具やテント、食料のほとんどを運んでくれたし、僕がはぐれてしまわないようとても気を配ってくれていたからだ。

1909年、イタリアの貴族であり、当時最も優れた登山家のひとりだったアブルッツィ公はバルトロ氷河をのぼってK2をめざした。結局頂上にはたどりつけなかったらしいが、彼は周囲の山々の美しさに感動し、日誌にこう書き残している。
「山の美しさという点で、この眺望に勝るものはあるまい。氷河と岩がおりなす信じがたい光景には、登山家のみならず芸術家も満足を覚えるであろう」

太陽はムズターグ・タワー山のぎざぎざの尾根のむこうに沈んだ。
長くのびた影が、谷間の東側のがけをのぼり、ガッシャブルム山のするどい一枚岩にまで達する。
僕は日が暮れていることに気づいていなかった。この日の午後、僕がぼう然と見つめていたのは、これまでの登山であまりなじみのなかったもの――つまり〝失敗〟だった。
ズボン（シャルワール）のポケットを探った。
指先には琥珀のネックレスの感触がある。妹のクリスタがよく身につけていたものだ。
クリスタは3歳のときに急性髄膜炎にかかり、その後遺症で苦労することになった。12歳年上だった僕は、彼女のことをずっと見守ることに決めた。
クリスタはたびたび重いてんかんの発作を起こし、ごく簡単なことをするのにも苦労した。たとえば毎朝服を着るだけでも1時間以上かかった。
でも自分のことはなるべく自分でやらせようと、僕はクリスタのために仕事を見つけたし、バスの乗り方を教え、ひとりで出かけられるようにしたし、母にはいやな顔をされたが、ボーイフレンドができたときには避妊の方法を手ほどきした。
それから僕はアメリカ軍の衛生兵になり、小隊長としてドイツに派遣された後、看護学の学位を取るために勉強した。大学院ではてんかんについて学ぶため神経生理学の研究をした。その一方で車を

乗り回し、登山に明け暮れた。
クリスタは毎月会いにきてくれて、僕たちはいろんな場所に行った。カーレースに競馬にディズニーランド、そして自然の造形がすばらしいヨセミテ国立公園、どこに連れていってもクリスタは喜んでくれた。
クリスタは23歳の誕生日、母とふたりでアイオワ州のダイヤーズヴィルに行くことになっていた。そこはクリスタが大好きな映画『フィールド・オブ・ドリームス』のロケ地だった。ところが当日の朝、彼女は出発する数時間前にはげしい発作を起こし、そのままこの世を去った。
僕はクリスタが残したわずかな持ち物の中から、琥珀のビーズでできたネックレスをもらった。ネックレスには、最後にいっしょにやったキャンプファイアのにおいがまだ残っている。
ネックレスはタルチョ（チベットの祈りの旗）に包み、パキスタンまで持ってきた。登山家としていちばん意味のある行いでクリスタを弔うために。世界で最も登頂がむずかしいとされる山、K2に登って、標高8611メートルの山頂にクリスタのネックレスをおいていきたい。
両親は信心深かったが、僕は神がどのようなものかまだ決められない。だが、どんな神でもかまわない。いと高きところに住む神に、捧げものをしたかったのだ。

3ヵ月前、僕は素足にテバ社のスポーツサンダルを履き、重さ40キロのバックパックを背負って、はりきってアスコーレ村を出発した（バルトロ氷河に向かうにしては、ちょっと場ちがいな格好かも

しれない）。
ともに世界で2番目に高い山をめざす仲間たちは、イギリス、アイルランド、フランス、アメリカからそれぞれ集まった、金こそないが、やる気だけは異様にあるチームだった。
ヒマラヤ山脈のむこう、はるか南東にあるエヴェレスト山と比べても、K2の方がはるかに厳しい山だとされている。〝非情の山〟とまで言われるK2は、登山家にとっては究極の試練だ。切り立った花こう岩の斜面はあまりにも急で、雪さえすべり落ちてしまう。
だが35歳の僕は、雄牛のようにたくましかった。11歳でキリマンジャロにのぼり、学生時代はヨセミテのけわしい山々の間ですごし、ヒマラヤの山にはもう5、6回のぼったことがある。たとえK2が地上で最大にして最悪だと言われようと関係ない。僕は頂上にたどりつけることを、信じて疑わなかった。
山頂まであとほんの少しだった。あと600メートルもなかった。
それなのに今ではK2はすっかり遠ざかり、僕の背後の霧の中にある。クリスタのネックレスもまだポケットの中にある。
どうしてこんなことになってしまったんだろう？
袖口で目をぬぐう。泣くことなんてめったにないのに。たぶん高度のせいだろう。たしかにいつもの僕じゃない。78日間、K2と命がけの格闘をした後では、すっかり弱ってしまい、ぬけがらみたいだ。アスコーレ村まであと80キロもの危険な道のりを、歩いていける力が残っているだろうか。

落石のするどい音がひびき、我に返る。
目をあげると、3階建ての家ほどある巨大な岩がごつごつした斜面を転がり落ちてくる。岩はだんだん速度を増して僕の前の道にぶつかり、氷河がくだけ散った。
何とか注意力をかき集めようとした。
あらためて景色を眺める。いつのまにか長くのびた影が、東の山々の斜面に届いている。
人が歩いた形跡を、最後に見たのはいつか？
たしか1時間ほど前、隊商（キャラバン）のラバがつける鈴の音が聞こえた。インド軍との戦場、シアチェン氷河に弾薬を運ぶパキスタン軍の隊商（キャラバン）だ。

何か他に形跡がないか、道をよく調べてみる。
アスコーレ村へ向かう道なら、きっとほかにも軍が通った跡があるだろう。だが、ラバのふんも、タバコの吸いがらも、空き缶も見当たらない。ラバのえさとなる干し草の切れはしさえも。よく見ると、ここは道なんかじゃない。岩と氷の間にできた、刻々と変化する迷路の一部だった。どうしてこんな場所に迷いこんでしまったのだろう。集中して考えてみようとしたが、だめだ。高所にあまりにも長くいたせいか、思考力も行動力もすっかり鈍っている。

岩だらけの斜面を1時間ほどのぼっていく。岩にも氷にも邪魔されない、遠くが見渡せる場所に出

ようとした。
何か目印が見つかるかもしれない。よく思い出す。握りこぶしのような形をした岩だらけのがけだ。それさえ見つかれば、正しいルートにもどれる。だがのぼってみたところで、さらに疲れただけだった。人のいない谷間に迷いこみ、薄れていく光の中に立った。ずっと眺め続けてきた景色が、まるで見慣れないもののように見えた。
薄い空気のせいで頭がもうろうとしている。一瞬、パニックにおそわれかけた自分を落ち着かせるため、腰をおろして持ち物を確かめることにする。
色あせた紫の小さなデイパックから出てきたのは、パキスタン製の軽量の軍用毛布、空っぽの水筒、プロテインバー1本……だけ。高山用の羽毛寝袋、暖かい服、テント、ストーブ、食べ物、懐中電灯、マッチ……は、ポーターのムザファが持っていった荷物の中だ。
もう今晩はここですごして、明日の朝、日がのぼってから道を探そう。
気温はとっくに0度以下になっているが、死ぬことはないだろう。真夜中に不安定な氷河の上を歩き回る方がずっと危険だ。その程度の判断力は残っていた。あちこちでクレバスが大きな口をあけている。うっかりすれば、厚さが数十メートルもある、青い氷の下に落ちてしまう。
のぼってきたがけをそろそろとおりる。クレバスに落ちないように、または眠っている間に岩が落ちてきてつぶされないように、がけから十分離れた、足場のしっかりしたところ。平らで頑丈そうな岩が見つかったのでそこに落ち着いた。

冷たい雪を素手ですくって水筒に入れる。それから毛布でからだを包み、自分がどんなに孤独で無防備かということを意識から追い払った。

腕には傷が残っている。救出活動のときにロープがすれてできた傷だ。こんな高度にいると、傷はなかなか治らない。ぶかっこうにまいた包帯をほどいてうみを出さないといけないが、もうそんなことをしても意味がないような気がした。ごつごつした岩の上に震えながら横になった。太陽の最後の光が赤く燃え、それからゆらめいて消え、あとには紺色の残像だけが目に映った。

アブルッツィ公の探検に同行した医師が、この山並みの中で感じた寂しさについて記録した。彼らは二十数名のヨーロッパ人に加え、折りたたみ椅子や銀のティーセットを運ばせるために260人もの地元ポーターを引き連れた。さらにはヨーロッパの新聞まで届けてもらっていた。にもかかわらず、医師はこんなふうにつぶやいていた。

「深遠なる沈黙が谷をおおい、我々の精神も、漠然とした重みに打ちひしがれている。これほど孤独で、孤立し、自然に見放され、自然と触れあうことができないという感覚におそわれる場所は、ほかにないだろう」

孤独には慣れていた。大勢のアフリカ人に囲まれて育ったし、ヨセミテのハーフドーム山で野宿したこともある。

そのおかげか僕は落ち着きはじめていた。高山病で頭の中がまひしていたせいかもしれない。

風が吹きはじめ、身を切るような寒さの中に、澄みきった星空が広がる。

周囲を意地悪く囲む山々を見てやろうと思ったが、やみの中では何もわからなかった。毛布にくるまって1時間ほどすごした。凍っていたプロテインバーを体温でとかしてかじり、砂の混ざった氷をとかして飲む。体がはげしく震える。この寒さの中で眠るなんて無理だ。仕方なく満天の星のもとで横になり、失敗の原因について思いをめぐらせることにした。

登山隊にはスコット・ダースニー以外に、リーダーのダン・マズーアとジョナサン・プラット、それからフランス人のエチエンヌ・フィーヌがいた。みんな山岳界のサラブレッドで、中でもエチエンヌは身のこなしが軽く、ザイルを使う技術もずば抜けていた。一方で僕はのろかったが、熊のように頑丈だった。身長193センチ、体重95キロという図体で、フットボールに向いていて、山登りのようなやっかいな活動が好きだった。

K2の山頂まであと600メートル弱の地点に、登山隊は簡単なキャンプを作った。そして食べ物や燃料、酸素のボトルなど、頂上にアタックするときに必要な物資を、途中の小屋まで8往復して運びこんだ。

このシーズン、K2をめざしたほかの登山隊は、100年ほど前に開拓された、南東の〝アブルッツィ稜〟というルートを選んでいた。

だが、僕たちは西稜のルートを選んでいた。ここは急斜面が多く、くねくねして、難所だらけの危険なルートで、かつて登頂に成功したのは、日本の大谷映芳とパキスタンのナジール・サビルの組だけだった。

そのぶんやりがいを感じていた僕たちは、誇らしい気持ちで西稜をよじのぼりはじめた。そして少しひらけた場所にたどりつくたびに、そこに燃料の缶やまいたロープをおろして休み、ただそんなふうにしているだけでも、自分たちは無敵であるような気がした。たとえ何か問題が起こったとしても、僕たちがK2の頂上に立つのはまちがいないと思っていた。

のぼりはじめてから70日をすぎた夜のことだ。僕とスコットは物資を補充するために96時間ぶっ続けで働いた後、ベースキャンプにもどって、ようやく眠りにつこうとしていた。

暗くなってきていた。最後にもう一度、K2の山頂を見ておこうと望遠鏡をのぞいた。そのときふと、上の方で何かが点滅しているのが見えた。

誰かがヘッドライトで合図を送っているにちがいない。

エチエンヌだろう。

エチエンヌはアルピニスト（この言葉には、登山家として尊敬の気持ちがこめられている）として、最小限の装備で身軽にすばやくのぼるのが持ち味だ。だが高度に体を慣らすことを考えず、先を急ぎすぎてしまうことがあった。

僕とスコットはひと仕事終えて、下におりてきたばかりだった。とうていエチエンヌを助けにいく

力が残っているとは思えず、ベースキャンプにいるほかの登山隊に助けを求めたが、残念ながら誰も引き受けてはくれなかった。

僕たちは2時間テントで休んでから水分を補給し、再び出発することにした。

その頃登山隊のメンバー、ダンとジョナサンは標高7600メートルの第4キャンプから命からがら山をくだっているところだった。

彼らはエチエンヌとキャンプで合流し、いっしょに山頂をめざすことになっていたらしい。だがエチエンヌはキャンプにたどりつくなり倒れてしまった。エチエンヌは息を切らしながら「肺の中でガラガラ音がする」と言ったらしい。

高山病の症状のひとつ、肺水腫（はいすいしゅ）だ。肺に水がたまる病気で、すぐに低地におろさなければ命にかかわる。エチエンヌは口からピンク色の泡を吹き出している。助けを呼ぼうにも呼べない。無線機は雪の中に落として使えなくなっている。もはや3人は山をおりるしかなかった。

ダンとジョナサンは、交代でエチエンヌを体にくくりつけ、急斜面が多く、くねくねして、難所だらけの西稜をくだっていった。まるでジャガイモの袋でもぶら下げているような重さを感じながら、そのまま共倒れになることを覚悟しながら、ひたすらひき返した。ダンとジョナサンは本当の英雄だと思う。あれだけ夢見ていたK2登頂よりも、エチエンヌの救助を選んだのだから。

一方で僕とスコットは24時間かけてけわしい道をのぼり、第1キャンプ近くの岩の上で3人と合流

した。
エチエンヌは何度も意識を失った。脳がむくんでしまう脳浮腫（のうふしゅ）の症状も出ている。ものを飲みこむことができず、意味もなくブーツのひもをほどこうとする。外科専門の看護師でもある僕は、エチエンヌの症状をやわらげるために注射を打った。
僕たち4人はすっかり疲れきっていた。だが、エチエンヌを連れてごつごつした岩の斜面をさらに48時間くだった。
ふだんのエチエンヌは英語を上手に話したが、たまに意識をとりもどしたときにはフランス語で何かぶつぶつ言っていた。難所にさしかかると、経験をつんだ登山家の本能なのか、力をふりしぼって装備をロープにくくりつけようとする。が、じきにぐったりしてしまう。
僕とスコットが出発してから72時間後、エチエンヌを前進基地の平らな地面にようやくおろすことができた。すぐさまスコットは下にいるカナダの探検隊に無線で連絡して、パキスタン軍の救助用ヘリを呼んでもらった。
それがもし実現していたら、〝ヘリを使った救助として最高地点〟という世界記録が誕生するはずだったが、軍司令部の答えは「天候が悪く風も強いから、もっと低いところまでおりてくるように」だった。
指令を出すのは簡単だろうが、それを実行するのは困難だ。
だが仕方ない。僕は再びエチエンヌを寝袋に入れて、体にしっかりしばりつけて、氷結した滝の中

を通る困難な道のりを黙々と歩いた。僕もスコットも限界まで体力を使い果たしていた。ほとんど這いつくばるように前進した。
さらに6時間かけてK2のベースキャンプにたどりつくと、他の登山隊の大きな歓声とともに迎えられた。
パキスタン軍のヘリがエチエンヌを連れていく。カナダ登山隊のメンバーがごちそうを作り、宴会が開かれる。だが僕とスコットは飲んだり食べたりするどころか、用を足すこともせず寝袋に入り、死んだように眠った。2日間、僕とスコットはとぎれとぎれに眠り続けた。高所だからいくら疲れていても熟睡はできなかった。
テントを吹きぬける風が、アート・ギルキー追悼碑の金属の皿を鳴らす。アート・ギルキーは1953年のアメリカ登山隊の一員で、この地で遭難した。彼の追悼碑には非情の山、K2で命を落とした登山家の名前を刻んだ金属の皿が飾られている。
目を覚ますと、ダンとジョナサンからの伝言があった。ふたりとも上のキャンプにもどったらしく「体力が回復したらいっしょに頂上をめざそう」と書いていた。うれしかった。だが体力は回復しそうにない。物資補充に続く救助活動によって、すっかり使い果たしてしまっていた。
（ダンとジョナサンはその1週間後に登頂を果たし、はなばなしく帰国した。だがこのシーズン、K2登頂を果たした16人のうち4人が、下山の途中で命を落とした）

僕たちはようやくテントから這い出たが、歩くのがやっとというありさまだった。エチエンヌは命こそ助かったが、代償として足の指をすべて失うことになったらしい。僕とスコットは、もう山頂をめざせなかった。追悼碑に自分の名前が加わるのはまっぴらだったから、いっしょに文明社会にもどることにしたのだ。

＊

そして今、僕は道に迷っている。

救助活動のことを思い出しながら、薄い毛布にくるまって夜明けを待ち、何とか寝心地のいい姿勢をとろうとしている。

僕は背が高いので、体をのばそうとするとどうしても頭がつき出てしまう。K2の登山中に、体重は14キロ減った。岩の上でどう寝返りをうっても、冷たい岩が骨に当たる。ときどき遠のく意識の中で、氷河の奥底から聞こえるまるで歯車がきしむような音を聞きながら考えた。クリスタの弔いは失敗したが、仕方がない。だめだったのは体が弱ったせいで、意志が弱かったからじゃない。誰にだって体力の限界はある。そして僕は今生まれて初めて、その限界がどういうものかを肌で感じている。

なぜそのように先のことを思いわずらい、
いたずらに頭を悩ませるのか？
不安を捨てて、アラーの御手にすべてをゆだねよ。
アラーは汝の知らぬまにすべてを定めたのだから。

——Omar Khayyam.The Rubaiyat
オマル・ハイヤーム『ルバイヤート』

目が覚めた。おだやかな朝だ。
頭は外気にさらされ、枕のかわりに平らな岩がある。
……息が……できない？
体にまきつけた毛布の中から、死にものぐるいで手を引っ張りだし、大あわてで顔のあたりを探った。氷が口と鼻の穴を薄くおおっている。氷をはがして深く息を吸いこむと、小さな笑いがこみ上げてきた。

ひと眠りした後で頭がぼけている。自分が一体どこにいて、何をしているのか、すぐには思い出せない。のびをする。岩に当たっていたせいでしびれてしまった部分をさする。徐々に感覚がもどっていくのを感じながら、あたりをゆっくり見回してみた。山々があり、その頂は淡いピンクや紫、青といった色に輝いている。まるでシュガーパウダーをまぶしたようだと思った。まもなく日の出をむかえる空は、風もなく澄み渡っている。

手足にまた血がめぐりはじめた。同時に、自分がどんなにやっかいな状況にあるか、記憶が順を追ってよみがえってきた。仲間がおらず、ここがどこかもわからない。だが不安はなかった。朝が来たから、何とかなるだろう。
カラスによく似た鳥が、頭上で輪を描きながら飛んでいる。その大きな黒い翼は、山頂をかすめん

ばかりだ。僕は毛布をリュックに押しこみ、水が半分入った水筒のふたを開けようとしたが、指がかじかんでうまくいかない。指が動くようになったら飲もうと水筒をそっともどした。上空を飛んでいた鳥は、僕が動いているのを見て興味を失ったのか、翼をはためかせ氷河をくだっていった。

わずかでも眠ることができたおかげだろう。頭がはっきりしてきたような気がする。ふり返って谷を見あげてみたら、ふと気がついた。ここまできた道を引き返していけば、数時間くらいで正しい道にもどれるはずだ。

北をめざして進んだ。まだ感覚が鈍っている足で、岩につまずいたり、力をふりしぼってクレバスを飛びこえたりしながら。それでもいい方向に向かっているという感覚を味わいながら。

子どもの頃よく歌っていた歌が、ふと口をついて出てくる。

「イエス・ニ・レフィキ・ヤング、アー・カイェー・ムビングニ（天にましますイエスは、我らのよき友人なり）」

スワヒリ語の歌詞だ。遠くにキリマンジャロ山をのぞむ小さな教会で、日曜の礼拝のときによく歌ったものだ。

ふと考えると、これはかなり奇妙な状況だろう――パキスタンで迷ったアメリカ人が、スワヒリ

語を使ってドイツの賛美歌を歌っているのだから。

だが、救われた。

蹴飛ばした小石がクレバスに転がり落ちる。数秒してから、地下を流れる川に、ポチャンと落ちる音が聞こえる。

巨大な岩と青い氷だけが広がる、この月面のような世界では。

その歌はともしびのように、僕の心を温めてくれた。

1時間がすぎた。さらにもう1時間。

渓谷から急な道をのぼり、よつんばいになって雪庇（せっぴ）を乗りこえ、尾根の上にたどりつくと、ちょうど太陽が谷間を離れ、その姿を大空にあますところなくさらした。目を射ぬかれたような気がした。

目もくらむような雄大な光景だ。ガッシャブルム山、ブロードピーク山、ミトレピーク山、ムズターグ・タワー山――氷をいただく巨大な山々が山肌をあらわにし、さえぎるものもなく日光が照りつけ、まるでかがり火のように燃えている。

岩に腰かけて、水筒の水を飲み干した。この光景はとても言い表せない。

ある山岳写真家は、バルトロ氷河に付き添う山々が刻一刻と移り変わる美しさをとらえようと長年挑んだが、とても叶わなかった。彼はここを地上で最も美しい場所だと考え、〝山の神々の玉座の間〟と名づけた。

もう何ヵ月もこの地ですごしているのに、山々がくり広げるこの劇的な光景にすっかり見とれてしまった。夏の間中ずっと、僕には最高峰K2の〝存在〟しか目に入らなかったが、この朝は山というものを初めて無心に眺めた。壮観だった。

歩き続ける。階段状にそそり立つ山肌、茶と黄土色の花こう岩がおりなす稜線、力強い調和を見せながら孤高の峰へと連なっていく――完璧な建築美。

心は不思議と満ち足りていた。体はすっかり弱り、このまま食べ物も暖かい服もなければ生きのびる可能性は低いが、関係なかった。氷河からとけて流れ出る水で水筒を満たす。飲んで冷たさに震えた。だが自分に言い聞かせる。食べ物がなくても数日間は平気だが、水は飲まなければ。

昼が近づいた頃、ごくかすかに鈴の音が聞こえてきた。

その音を追って西へと向かった。ロバの隊商（キャラバン）だ。あわててメインルートを示す石の目印を探すが、あたり一面、石が散らばっている。

そして不意に1500メートルはあるだろう大きな岩壁に行く手をはばまれた。

いつのまにか正しいルートをはずれてしまったようだ。さっきまで歩いていた方へ再び引き返し、たどるべき道の手がかりを探した。半時間ほど歩いたところで、タバコの吸いがらが、そして石の目印が見つかった。鈴の音をたよりに、道なき道を進む。鈴の音は、前よりもはっきりと聞こえるようになっている。

隊商（キャラバン）は見当たらない。だが1キロ半、もっと先かもしれない。

人の姿が見えた。氷河につき出した岩の上、空を背景に誰かが立っている。

呼びかけてみたが、遠すぎて声が届くはずもない。その人影は消えてしまった。が、しばらくしてからまた別の岩の上に現れた。さっきより数百メートルほど近い。残っている力をふりしぼり、大声で叫ぶ。人影はさっとこちらを向き、急いで岩からおりて、また見えなくなった。

氷河にはたくさんの岩が横たわっている。岩と同じような色のうす汚い服を着た僕の姿は見つけにくいはずだ。僕の声は岩の間でひびいた。

走る力は残っていなかったが、急ぎ足で息を切らしながら、最後にあの人影が見えた場所に向かった。数分ごとに大声をあげた。自分でもそんな声が出せるのがおどろきだった。

そして、ようやく相手と会える。

その人はクレバスのむこうで、クレバスに負けないくらいの大きな口を開けて、笑みを浮かべていた。

ムザファだ。荷物を運んでもらうために、僕が雇ったポーターだ。彼は荷物をいっぱいつめこんだ僕のバックパックを背負い、小さく見えた。

ムザファはクレバスの幅がせまくなっている場所を見つけると、40キロもある荷物を背負ったまま、ぴょんと飛び越えた。

「グレッグ（ギレグ）さん！　グレッグ（ギレグ）さん！」ムザファは叫びながら、荷物をおろすなり僕に抱きついてきた。

「神は偉大（アラー・アクバル）なり！　よかった、無事でしたか！」

ムザファは僕より頭ひとつ分くらい背が低い。それに僕より20歳ほど年上のはずだが、その力強さと勢いに圧倒された。僕は息が苦しくなってしまい、よろよろとその場にへたりこむ。

ムザファは体を離すと、僕の背中をうれしそうにピシャピシャたたいた。たたかれたせいか、よごれたシャツ（カミーズ）から砂ぼこりが舞ったせいか、咳が出てとまらない。

「お茶（チャイ）にしましょう」ムザファは僕の弱った体を気づかう。「お茶（チャイ）を飲めば、力が出ます」

そして風の入らない小さなほらあなへと僕を導く。荷物にくくりつけてあったヨモギの束をふたつかみほどむしりとり、ぶかぶかな上着のポケットから火打ち石をひっぱり出した。紫色がすっかり色あせたゴアテックスの上着。今までバルトロ氷河を案内した登山家の誰かからもらったものだろう。ムザファは金属製の湯わかしを手に腰をおろし、お茶の準備をはじめた。

ムザファ・アリと出会ったのは、スコットとK2をおりた4時間後だった。

K2のふもとから、ブロードピーク山のベースキャンプまでの距離は5キロほど。K2にのぼる前、スコットがメキシコ女に会いに通っていた頃なら、45分もあれば十分行ける距離だった。ところが登山後のくたびれきった足で歩いたら4時間。そこから重荷を背負って、さらに100キロ近くも

歩くなんて考えられなかった。

そこへ現れたのが、ムザファとその友人のヤクブだった。ふたりはメキシコ登山隊のポーターとしての仕事を終え、バルトロ氷河を手ぶらでくだって帰る途中だった。

1日4ドルで僕たちの荷物をアスコーレ村まで運ぶと言う。ありがたく受け入れた。手もとにはほんの数ルピーしか残っていなかったが、山を無事におりられたら、もっとお礼をはずもうと思った。

ムザファはバルティ族だ。

バルティ族は〝パキスタン北部の高地にある渓谷〟というきわめて過酷な環境で暮らす。彼らは600年以上前、もともといたチベットの南西から、ネパールのラダック地方を通ってこの地にやってきた。

岩だらけの山道を越えてくる間に仏教は忘れ去られた。かわりに、自分たちをとりまく厳格な環境に見合った厳格な宗教、イスラム教シーア派を信じるようになった。一方で使う言葉には、チベット語の名残がある。

小柄で頑丈な体と、誰も訪れることのない過酷な高地でも暮らしていける、すぐれた運動能力。

登山家たちはバルティ族を見て、ネパールのシェルパ（ヒマラヤ登山の支援を主な生業としている、ネパールの高地少数民族）に似ていると感じる。だが、違いも多い。バルティ族は無口でよそ者に対する警戒心が強い。また熱心なイスラム教徒であるため、西洋人の間では、仏教徒のシェルパほ

どなじみがない。

彼らは結託して不平不満をまくしたてるから、いい加減うんざりさせられてしまう。体臭はおおむねきつい。いかにも山賊といった雰囲気。しかしその荒々しささえ気にしなければ、忠実で気高い心の持ち主であることがわかるだろう。たくましく、困難や疲労にも耐え、物事によくいどむ。小さくてやせた体とコウノトリのような足を動かして、よそ者なら手ぶらでも足をふみ入れたくないような道を、毎日毎日40キロもの荷を背負って進むのである。

～Karakoram:Thre Ascent of Gasherbrum Ⅳ Fosco Marainiー

（『ガッシャブルム4ーカラコルムの峻峰登頂記録』フォスコ・マライーニ）

ムザファはほらあなの中でしゃがみこむと、火打ち石を使ってヨモギの葉に火をつけ、息をさかんに吹きかけて燃えあがらせた。彫りの深い整った顔つきが浮かび上がる。本当は50代半ばだが、ところどころ抜けた歯と日にさらされた肌のせいかずっと老けて見える。彼が準備していたのはバター茶（バイューチャ）で、バルティ族の食事に欠かせないものだ。

ムザファは黒ずんだブリキの湯わかしでお茶を入れ、塩と重そうとヤギの乳を加える。さらにバルティ族にとっていちばんのごちそうである古いヤクのバター（マー）を薄く切りとって入れ、あまりきれいとはいえない人さし指でかきまぜた。

それを見ながら、僕は不安になった。ここへ来てから何度もバター茶（バイューチャ）にお目にかかってきたが、そのにおいときたらフランス人が作ったいちばんくさいチーズよりもひどい。断る口実はないものかと思った。

ムザファから湯気の立つコップを渡されると、僕は思わず吐きそうになった。だが体が塩分と温かさを求めている。コップの中身をぐっと飲み干す。ムザファがお茶をつぎ足してくれる。また飲み干した。

「そうです、グレッグ（ギレグ）さん！」

3杯目のお茶を飲み干すと、ムザファは大喜びで僕の肩をたたき、小さなほらあなにはさらに砂ぼこりが立ちこめた。仲間のスコットは、ムザファの友人ヤクブといっしょに、先にアスコーレ村に向かったと言う。それを聞いて安心した。

それから3日間、バルトロ氷河をあとにするまで、ムザファは僕から決して目を離そうとしなかった。

僕には見つけることすらできないような道でも、ムザファにとっては大通りを歩くのと変わりない。「ついてきて」と言い、僕の手を引く。素足にたぶん中国製の安っぽいスニーカーを履いた彼の足取りを、僕は黙々と追っていく。

ムザファは信心深いイスラム教徒で、毎日5回の祈りは欠かさなかった。だが、たとえ祈っているときでさえも、ときどきメッカから目を離し、僕がそばにいるかどうかを確かめた。

「これはバルティ語で何て言うの？」

僕は何か新しいものに出会うたびに、名前をたずねた。氷河は「ガン・ジン」、なだれは「ルド・ルト」。イヌイットの言葉には〝雪〟を表す語がたくさんあるが、バルティ族の言葉は〝岩〟についての語が豊富だった。「ブラク・レプ」というのは、その上で眠ったり料理したりできる平らな岩。「クロク」はくさび形をした岩で、石造りの家のすきまをふさぐのに役立つ。小さな丸い石のことは「ホドス」と言う。バルティ族は、毎朝出かける前に、火で熱したホドスをパン生地でくるみ、「クルバ」というイースト菌を使わない丸いパンを焼いた。僕はわりと語学が得意なので、基本的なバルティ語はすぐに覚えられた。

せまい谷を進んでいくうちに氷は終わった。

3ヵ月と少し。僕は本当に久しぶりに、しっかりとした地面の上におり立った。

バルトロ氷河の先端は谷底にあり、黒くよごれたジェット機の鼻先のように見えた。そこから数十キロに渡って氷の下を流れる川が、今度はジェット機の噴射のように勢いよく空中にふき出している。

この泡立ちながら流れる水が、ブラルドゥ川の源流だ。

あるときスウェーデンのカヤック乗りがドキュメンタリーの撮影のために、スタッフといっしょにここへやってきた。ブラルドゥ川からインダス川に出て、3000キロほど先にあるアラビア海まで旅をしようという企画だった。出発してから数分後、彼は荒々しいブラルドゥ川の力で岩にたたきつけられ命を落とした。

*

数ヵ月ぶりに花を見た。花びらが5枚あるピンクの野ばらだ。ひざまずいて、しげしげと眺めていると、永遠の冬の世界から帰ってこれた気がする。

歩くにつれて、川岸にアシやヨモギなどの植物がちらほらと見られるようになってきた。このあたりは岩だらけで、生き物はそれほど多くはない。だが、僕には命があふれているように思えた。標高3400メートルあたりまでおりてくると、秋の空気が心地良かった。空気がこんなにもずっしりとしていて、ありがたいものだとは。

バルトロ氷河の危険を無事に乗り切れたので、ムザファは毎日ひと足先に行くようになった。先に行ってテントを張り、夕食を用意して僕を待っていてくれるのだ。

僕はときどき道をまちがえたが、すぐ正しい道にもどることができた。夕方、ムザファのたき火が見えるまで、ずっと川に沿って歩けばいいのだから。

ただ、弱っている足で進むのはそれほど楽ではない。でも歩くしかない。何とか歩き続けるが、立ちどまって休むことも増えた。

K2をあとにしてから7日目、ブラルドゥ渓谷のがけの上に初めて木の姿を見つける。5本のポプラの木が強い風に吹かれながら、手招きをするようにしなっていた。きちんと並んでいるから、人の手が入っているのだろう。

生きてもどってきたのだ。木を見て僕は実感した。

ポプラの木のむこうには、あんずの林が広がっていた。9月半ば、標高3000メートルのこの地では、もう収穫は終わっている。

熟れた果物が、何百もの平らなかごに積んであった。ポプラの木の葉は実った果物の色をうつし、まるで燃えているようだった。

かごのそばでは女の人たちがひざまずき、実を切って種を出して、種の中から仁をとり出していた。女の人たちは、僕の姿に気がつくとショールで顔をかくし、ささっと木のうしろにかくれてしまった。

「アングレージ」つまり〝よそ者の白人〟から逃げたのだ。

黄色く色づいた畑の間を歩いていくと、刈り入れをしていた女の人たちは、畑のソバや大麦にかくれ、こちらの様子をうかがった。

だが、子どもたちは逃げもかくれもせず、あとからぞろぞろついてきて、僕のズボン（シャルワール）を指さした

り、手首を探って腕時計を探したり（僕は時計をしていなかったが）、かわるがわる手を引いてくれたりした。

ふと自分の姿が気になった。もう3ヵ月以上もシャワーを浴びていない。髪の毛は伸びっぱなしでボサボサだ。自分がばかでかくて、きたならしい男であるような気がした。

子どもたちをこわがらせないように背をかがめてみたが、みんな僕をこわがっている様子はない。よく見ると、子どもたちの着ているズボン（シャルワール）・シャツ（カミーズ）は、僕と同じくらいよごれたり破れたりしているし、こんなに寒いのにほとんど靴も履いていない。

この村のにおいは、1キロ半離れていてもわかった。ねずの木を燃やすにおいと人間の体臭は、不毛の高地からもどった直後にはとてもきつく感じられた。

村の入り口には、ポプラの木で作った簡単な門がぽつんと立っている。そこにたどりつく頃には、ついてくる子どもが50人ほどに増えていた。

村の入り口でムザファが待っているのではないかと目をこらしたが、見当たらない。そのかわり、〝トピ〟という羊毛でできた灰色の小さなふちなし帽をかぶり、その帽子と同じ色のひげを生やした、しわだらけの老人が立っていた。

まるで渓谷のがけから彫り出したような、力強い姿だった。

「こんにちは。神の平和があなたとともに（アッサラーム・アライクム）」老人は言い、僕と握手をした。

名前はハジ・アリといい、この村のヌルマダル、つまり村長だという。
僕は案内されるままに門をくぐった。ここの人々は、客人を歓迎する習慣があるらしい。ハジ・アリは小川の近くで立ち止まり、僕に手と顔を洗わせてから、自分の家に招き入れてくれた。
ここはブラルドゥ川の２００メートル上にある岩場の村だ。切り立ったがけに、危なっかしくしがみついているとも言える。ひしめきあった石造りの家には、何の飾り気もない。平らな屋根の上に、彩り豊かなあんずや玉ねぎ、小麦などが並べられていなければ、がけとほとんど見分けがつかない。

案内された村長ハジ・アリの家も、他の家とたいして変わりなかった。
寝具をたたくと、砂ぼこりが部屋中に立ちこめた。それから炉の近く、上座にあたる場所にクッションをおき、僕をそこに座らせた。
お茶を入れている間、言葉は交わされない。
ただ何十人もの男たちが次々に入ってくる足音と、炉のまわりにおいたクッションに座る音しか聞こえなかった。
やかんの下で燃えているのはヤクのふんだ。強烈なにおいがする煙は、ありがたいことに天井に空けた大きな四角い穴からぬけていく。見上げると、僕についてきた子どもたちが、天井の穴をぐるりと囲んでのぞいている。
今まで、この村に外国人が来たことはなかったらしい。

ハジ・アリは刺繍の入ったベストのポケットに突っ込んだ手をせわしなく動かし、油やけしたアイベックスの干し肉をとり出し、緑色の噛みタバコ（ナスワル）をこすりつけた。肉にタバコの風味が移ったのを確認すると、僕にひと切れくれた。
ちょっとひるんだが、思い切って飲みこんだ。見ていた子どもたちは、うれしそうにくすくす笑う。
さらにハジ・アリは、バター茶（バイユーチャ）の入ったコップをよこした。それを飲んだとき、なぜか喜びのようなものを感じた。
歓迎の儀式が済むと、ハジ・アリは僕の方に身をかがめ、ひげの生えた顔をつき出した。
「チーザリー？」しゃがれ声で言う。うまく訳すのはむずかしいが、「どうしたんだ？」というような意味だ。
場にいる全員が僕を静かに見つめている。僕は片言のバルティ語に身ぶり手ぶりをまじえながら、いきさつを説明した。
自分はアメリカ人で、Ｋ２にのぼりにきたこと（そう言うと男たちの間から、感心したようなどよめきがあがった）、すっかり疲れ果ててしまったが、こうして何とかアスコーレ村にたどりつけたこと。そして、これから乗せてもらえるジープを探し、バルティスタンの州都、スカルドゥの町まで行きたい。それだけ言うと、僕はクッションにぐったりともたれかかった。何日も歩き続けたし、これだけの話を伝えるのにも苦労した。暖かい炉のそばで、やわらかいクッションにもたれ、やさしそう

な人たちに囲まれていると、どうにか押しとどめていた疲労感がどっと押し寄せてきた。

「ここはアスコーレ村じゃない」とハジ・アリは言った。足もとの地面を指さして言う。「コルフェ村だ」

僕はぎょっとして飛び起きた。コルフェ村？　聞いたことがない。カラコルムの地図は何枚も見たが、そんな名前はどこにものっていなかった。絶対になかった。

いやな予感がした。3ヵ月前、アスコーレ村にきたときに見ていた景色とどこかちがっていたのだ。正しい道を歩いていれば、橋を通ってくるはずだった。独特な橋だったからよく覚えていた。ヤクの毛を寄り合わせて作ったロープを、ふたつの岩の間に渡しただけの橋だった。だが、そこを通ってきた覚えがない。ポプラの木に見とれているうちに、曲がるべき道を見落としたらしい。

「アスコーレ村に行く」僕は声をふりしぼった。「ムザファという男に会わなければならない。ムザファが僕の荷物を全部持っている」

ハジ・アリは立ちあがろうとする僕の肩をつかみ、力強く押しとどめた。

「トワハ！」彼は呼びつけ、何か話しかける。

「今日、アスコーレ村、だめ。あぶない。半日かかる」トワハと呼ばれた男はハジ・アリの息子のようで、少し英語がわかるらしい。父親そっくりの澄んだ目でこちらを見つめながら、父親の言葉をたどたどしく通訳する。

「すべては神の思し召しのままに。あした、父が、ムザファ、呼びにやる。今は、ねむれ」

ハジ・アリはおもむろに立ちあがると、暗くなった空からのぞいている子どもたちに向かって、帰るように手をふった。男たちは、炉のそばから去っていった。

僕の頭の中では不安が渦をまいている。道をまちがえた自分が腹立たしい。心細さも感じたが、やがて深い眠りに落ちていた。